

一、はじめに

いま、わが日本丸が沈没の危機に瀕している。それは、経済活動ばかりでなく、日本人の人間性、つまり日本人の考え方、知恵、理性、哲学、思想、信念、価値観、行動様式等全ての面で日本全体の存在自体が問われているといってもいい。

バブル経済崩壊とともに、日本経済は長いトンネルに入ってしまった。戦後経済の復興と同時に、経済力と勤勉さを過信していたほとんどの国民が、次第に自信を失い不安に駆られてきた。総合力向上の中で経済立ち直りの一翼を担ってきたが、個人的には確たる自信が持てない、国民の不安は増幅される一方である。誰も彼もが後ろ向きになり、一斉に見えない出口を求めて彷徨い出した。彼らは、いまや完全に自信を喪失し、心理的恐慌状態に陥り、見えない出口を求めて右往左往している。正に、『迷える子羊』なのである。

この現状を打開し、再び人々に強力な自信と信念、エネルギーとバイタリティを付与し、かつての「活性化社会」を甦らせるためには、どうしたらよいのだろうか。

それにはその前提として、まず日本人がいまや失ってしまった「真心」と「魂」を取り戻し、教育改革を通じて国民の意識を変革することを強く想起しなければならない。

二、「真心」と「魂」の復権

①正義感の欠如

かつて大事を為すには、絶対的な《大義名分》が必要であった。そこには必ず、人を納得させ得るに足る道理があった。経済活動においても同じであった。「金儲け」にもそれなりの道理があった。邪道は潔しとしないのが、かつての日本人の気概であり、心意気であった。「金儲け」と表裏一体の「経済活動」においても、まず問われたのは、その経済活動が世のため、人のために為される事業であるかどうか、ということであった。「経済」の語源である「経世済民」は、「世を治め民を救うこと」である。

ところが今日の世の中を見ていると、殊更正義感の欠如が感じられてならない。倫理感もいずこへか消えうせてしまった。そのうえ日本人は心身ともに脆く、ひ弱になってしまった。正義感とモラルは、いつの間にか身の回りから消えてしまった。それらは、家庭でも学校でも教えられることがなくなり、大切な人間形成期にも身につける機会がなくなってしまったからである。その結果、国家の舵取りを委ねられている政治家にも、市井の人々にもこの正義感や、モラルが著しく欠落してしまった。それが、周囲の空気を沈滞させ、世の中全体に爆発的なエネルギーや、バイタリティを感じさせなくなった

大きな原因である。

②正義の意味と日本社会の骨組み

では《正義》とは、一体何なのだろうか。人の世を生きていくための正義、また社会活動における正義とは何なのか。《正義》とは言うまでもなく、「道理にかなっていて正しいこと」であり、道理にかなった、正しい行為が求められる。近年一時の浅はかな煩悩により、顧客を欺いたがために大きなしっぺ返しを喰らい、市場から退場していった企業は数知れない。一時の迷いが全てを破綻させてしまう。組織はもちろんのこと、一人ひとりの心の中に正義感があまりにも欠如しているからである。当たり前のことであるが、真面目に努力する者が報われる世の中が、本来あるべき姿なのである。

昔の日本の社会には大なり小なり、社会通念上当然と思える共同社会固有の規範のような有形無形のルールがあった。社会とは、【Everybody knows everybody.】の小さな世界であり、誰もが目の行き届く範囲内ではしかなかった。いわゆる小さな「ムラ社会」である。人々は「ムラ社会」に生まれ、そこで「ムラの掟」の感化と庇護の下に成長することが出来た。遙か天空には神がいて、その彼方から人々を温かく見守ってくれた。人々の心には神への敬愛が芽生えていった。近くには、神の身代わりとして鎮守様を建立し、人々は崇め奉って安寧と幸せを祈ったのである。人々から尊敬を集めていた村長（むらおさ）と称される長老が、神事の執行者として誰からも受け入れられる共通の掟を作り、人々はそれを固く守り、お互いが掟を守り抜くことを誓いあった。掟破りの挑戦を退け、掟を守っていくことが「義を正す」、即ち《正義》と称されたのである。

このように古来、日本の「ムラ社会」と称される村落には、その根底に「正義の掟」があったのである。《正義》なしには、「ムラ」の成立は考えられなかった。日本は古代及び中世封建時代の「ムラ」の仕組みを踏襲し、その上に現代社会のフレームを作り上げたのである。近代になって先進国家として発展し得たのも、日本古来の「ムラ社会」の基盤の上に「商工業」という器を被せて発展させてきたからである。日本発展の基盤は、基本的に「ムラ」の仕組みと伝統に基づいている。国家の基盤を支えてきた「ムラの掟」を、戦後の日本人がわけもなくぶち壊し、正義も倫理も断罪してしまったことに、日本経済失速の遠因があると思う。社会が行き詰まったいま、正に国民が戦後の歴史を振り返り、戦前の功績と同時に戦後の誤謬を検証して、その中から後世に伝えられるべき良き伝統を汲み取って、「真心」と「魂」の籠った新しい「掟」を作り直し、社会全般に浸透させていく時なのである。その強い覚悟と行動力がなければ、日本社会の真の復活と活性化は到底期待出来ない。

③「旧家族制度」崩壊の影響

共同社会が社会的にも経済的にも順調に発展していけるのは、人々の間にお互いの信頼と共感が存在するからである。戦後最も衝撃的な変化は、「日本型タテ社会」の支柱であった「旧家族制度」が崩壊したことである。その昔日本社会の底流には、精神的拠りどころとしてこのヒエラルキーを観念的に受け入れる情念と土壌があった。

にも拘わらず、戦後の民主憲法によって「旧家族制度」は、その存在すら否定された。全て封建時代の残滓と見なされ、悉く断罪されてしまったのである。だが、一方で新しい価値観は、民主的な手順で自ら勝ち得た価値観ではなく、アメリカに押し付けられた価値観だった。それを自分なりに曲解した価値観の挙句が、いまの日本の惨めな姿なのである。

果たしてこんな無節操なことでもいいのだろうか。「旧家族制度」の下では、それぞれの家庭で、年長者が年少者に対して身の回りのしつけや、簡単な礼儀、正しい行いが身につくように教えていったものである。地縁社会のルールや、周囲との付き合い方、禁じ手なども年長者が教えた。「ムラ社会」では、田植え時期や、収穫期のような繁忙期になると他家の人々の助力を仰いだ。お互いに助け合う中で、相互扶助や、思いやりを育てていった。どこの家庭でもある程度のモラルは、家族の間に浸透していった。

しかしながら、終戦を迎え規制や、掟から一気に解放された大多数の国民は、もはや過去の教えや、しつけに縛られなくなって、正義感とモラルを新時代に馴染まないものと軽視するようになった。最低限のルールさえ、自分勝手に都合よく解釈した。他人への気配りは消え、周囲の都合を無視し、みかけだけの共同社会となった。彼らの志向するところは、自分の家族の食い扶持と自分たちだけの豊かな平和であり、これではなりふり構わず掟を破って弱いものいじめをする弱肉強食の野獣の群れと変わらない。

人類は長い歳月を経て、何のために考え、知恵をしばって壮大な歴史を造り、後世に残る文化文明を発展させてきたのであろうか。これでは、時代のサイクルを考えるまでもなく、人類は一向に進歩していないと言ってもいい。

④「知・徳・体」のバランスを

健全な思考回路をいつまでも順調に起動させるためには、精神的なタフネスと逞しい健康な身体が要求される。だが、バブル経済の崩壊に併せて、戦後教育の欠陥が顕在化して社会全般にダメージを与え、国民は病んでいる。戦後の民主教育は、アメリカ民主主義を手本に導入されたが、その当時民主主義は充分咀嚼されないまま、中途半端に実施され普及していった。その結果、現実的な指導方法やカリキュラム面から見るとアメリカ流教育が志向した理想と方向性とは、かけ離れた実態になっている。

アメリカ流教育の目指すところは、ひとりの人間を独り立ちさせ、共同社会の一員として社会にとって役立ち、奉仕出来る人材に育成していくことを究極の目的に置いている。社会へ奉仕する気持ち、思考力と創造性を身につけさせる指導に力点を置いている。

一方わが国ではどうだろうか。幼いころから塾に行かされ、若い柔軟な大脳に細かい知識を詰め込まされ、取り敢えず上級学校へ進学する。幼いころから甘やかされ、大人になっても社会の一員として役立とうとの気概なぞさらさない。

「知育」「徳育」「体育」は終始一貫して、学校教育の三大モットーであった筈である。それにも拘わらず、結果的に「知育」は知識詰め込み主義に走り、創造性と思考力停止の人間を育成した。「徳育」面は見捨てられ、教える人と教える場もなく、礼儀知らずな人間が再生産されるまま放置された。「体育」に関しては、強い精神力と逞しさに欠けるひ弱な大人を輩出するだけだった。

古代ギリシャ、ローマ時代の「万能の人」の評価には、知的能力ばかりではなく、肉体的能力も大いに加味されていた。伝統的にヨーロッパ社会では、頑強な肉体は、万能な人のひとつの条件でもあった。わが国の現今の教育観には、この考えはない。

教育は、記憶力重視より、アメリカのように思考力と創造性涵養が優先されるべきであり、体育でもヨーロッパ流に基礎体力が養成されるべき若い時には、肉体の鍛錬にもっと時間を注ぐべきである。いまの若者は打たれ弱くなった。在学中に長距離競走を一度も走ったことがないとか、柔道のような個人勝負は戦ったことがなく、運動会の花形競技だった「騎馬戦」や「棒倒し」も知らない柔な男子が多くなった。これでは、持久力や闘争心、負けず魂が身に備わる筈がない。根気がなく、何ごとにもすぐ音を上げるような人間が温もりの学校から出て、生き馬の目を抜く世界を相手に果たして太刀打ち出来るだろうか。

三、教育復古主義が苦境を救う。

「正義」「倫理」「健康」は、戦前には普通の家庭や、学校の正課でごく当然のように教えられ身に付けてきたことである。戦前教育の美德を断罪せずに、いまにして活用していれば教育の荒廃のみならず、揺るぎのない逞しい日本国家の構築は、少なくとも今日よりはよほどましであったに違いない。

今日の日本は、自信喪失のクライがあり、失った自信を取り戻すことが大切である。それには、その原因である戦後教育の欠陥を克服して教育の原点と本質を見直し、「真心」と「魂」の教育を復活させることである。

教育改革の第一歩は精神と肉体の健全性であり、その手法は、家庭と学校を平行して改革していくことである。家庭と学校が連絡をとりあいながら、戦後十年で復興し、十年でダメにしてしまったぶざまな失敗を、再び十年以内に取り戻すとの強い決意で本腰で取り組むのである。非倫理的で、不見識な情報をマスコミから排除して、許容期限も出来るだけ短縮するよう努力する。少なくとも十年あれば、現在蔓延っている害虫は一応駆除される。戦後の復興パワーとそこに潜んでいた問題点の反省を込めた、逞しい日本の再生であり、知恵と逞しさが一体化した、新しい日本の創生である。輝かしい二十一世紀文明の誕

生となる可能性を秘めている。

①マスコミは「モラル」啓蒙に積極的関与を！

モラルは、本来家庭の中で厳しくしつけることが基本である。かつて日本の家庭における家族団欒は、話し合い、思いやり、助け合い、情報交換、社会常識、しつけ等を学ぶ学び舎であった。家庭内の「しつけ」なしには、常識的なモラルも身につかない。しかし、いまや大半の家庭が核家族となり、親が共働きの現実を考えると、家庭率先のモラル教育は生半可なことでは難しいと考えざるを得ない。当面家庭内教育が当てに出来ない現状、と影響力のあるマスコミのいまの娯楽重視のスタンスを考えると、現時点で最も子どもたちと接触する機会が多い学校側に依存することも故なしとしない。教育現場にキツイ重荷を負わせることになるが、辛辣に言えば、戦後の教育を荒廃させた元凶である教職員組合には、ここは名誉回復のチャンスと捉えて、真剣に倫理教育に取り組んでもらいたい。

マスコミは、これまで「心」の教育、情操教育についてあまり積極的ではなかった。しかし、今後は今までのような「われ関せず」では済まされない。社会的影響力の強いマスコミには、社会的責任のみならず、教育改革に主体的な役割を果たす責任がある。特に、影響力の強いテレビ関係者は、自分たちの仕事が次代の若者に重大な影響を及ぼす点を考慮して、若者を正しい道へ誘う指南役を務める責務があると認識するべきである。

②新カリキュラムと授業

公立学校にも新しいシステムが導入されようとしている。しかし、根本的な改革は、国が将来を背負う子どもたちにどういう大人になってもらいたいのか、との教育理念の立場で検討されるべきであり、残念ながらわが国の教育観には、その視点が欠けている。

わが国の初等中等教育の改革は、義務教育のカリキュラムの中に「正義」「倫理」「健康」を正課としてどのように採り入れ、どう位置づけるかにかかっている。現場の教育は、子どもが好きな人、教えることが好きな人に任せるに限る。教師が何もかも教えるのではなく、保護者、教育界OB、隠れた匠、地域の人たち、学生、ボランティア等の力を借り、教室からもっと飛び出して、フィールドワークや、社会活動の一端に直に触れる臨場の機会を増やして、「社会全体の総合力」で子どもたちを教育し、育成する視点があってもいい。子どもたちにとっても、一人の教師から画一的な教えを受けるのではなく、複数の異なるタイプの教師から、また教師以外の人たちから教室だけではなく、社会の一隅で、多くの人々と交わりながら教わることにより、多種多様な考え方や、知恵、情感等を汲み取ることが出来る。

繰り返すが、教育改革の中で特に学校で教えて欲しいことは、「真心」と「魂」である。いまの世の中には、人間として最も大切な「思いやり」とか、「魂」が感じられなくなった。人間教育の基本である「真心」と「魂」をどうにかして、初等教育の段階で教えることにより、全ての教育はスムーズに走り出すと信じている。

現状の「保健体育」を見直すことも検討されるべきである。健康な身体を養成し、維持していくための授業が、理論ばかりに傾き、真に肉体を鍛えるという本筋から外れているように思う。若い時に身体を鍛えぬくことを要求されたことが、そもそも過去において学校教育に「体育」が正課として定着した理由ではないだろうか。

四、まとめ

これまで述べてきた個人的な考察は、私自身が仕事や活動の現場ばかりでなく、日常生活を通して感じた持論である。臨場で信念を固めるに到った教育哲学でもある。

どれほど的を射た理論であっても、現場で実践し感得してこそ説得力が伴ってくる。現場の空気を吸わないと真実も全体像も分らないものだ。

他人の気持ちが分からない人間、礼儀を知らない人、秩序を乱す正義感のない輩、心身とも不健康な人たち、現場を知らない人たち、こういう人たちに頼り過ぎると世の中が少しずつ崩れてくる。日本がダメになった一つの原因もこういう人たちに任せっぱなしにしたからである。初心に還っていま、教育改革を柱に日本人の心に、「真心」と「魂」を取り戻す教育を導入することが、日本全体を再生させるうえで最も大切なことである。

戦後私たち日本人は多くの教訓を得た。無我夢中で気がついたら世界でもその頂点に立っていた。誰も彼もが有頂天になった。そこに大きな心の陥穽があったのではないだろうか。得意満面の不遜な気持ちの中には、正義感とモラルがやや欠けていたのではないかと思う。大和民族固有の尊い珠玉を手離してしまったのだ。いま逆境に立って改めて振り返ってみると、日本人は戦後経済成長の過程で、本来の知恵と張子の虎の経済力を遺憾なく発揮した。しかし、同時にその後の挫折の中で、正義、モラル、健康の大切さも再認識した。これからこの得がたい反省と教訓を糧に再生に向って立ち上がるべきである。

教育者でもない私が、僭越にも教育改革について提言したのは、仕事以外でも外国企業や、海外の学校・教育機関、スポーツ、実弾が飛び交う戦地、極貧の土地等の現場に足を踏み入れ、その場で感じたひらめき、感性、実感等が最も真実に近く、最も役立つことを身に沁みて覚ったからであり、それらの臨場でも「真心」と「魂」が最も心を打つものだと知ったからである。

小学生のころ、校長室に掲額されていた「温故知新」の意味について、敬愛する教師が「古きをたずねて新しきを知る。これは学校教育の原点だ」と話されたように覚えている。私の日本再生論もひもといていけば、結局は一昔前の教育を辿って行った挙句が、いまあるべき教育のスタイルに行き着いたということになる。